

◎ シリーズ 長岡京歴史散歩

101

引つ越しの時のまつり
柱穴に納められた土器

長岡京の調査では、当時の人々の住居が多く見
つかります。そのほとんどは掘立柱建物という地
面に穴を掘り、そこに直接柱を立てる形態のもの
でした。都が平安京に移る際、使えるものは捨て
たりこわしたりはしません。これらの建物も解体
され、運ばれていきました。その柱を抜き取った
跡から完全な形をした土器が見つかることがあり
ます。今回ご紹介するのもそのひとつです。

長岡京右京七条一坊九町、現在の住所では長岡
京市東神足二丁目にある日本輸送機株式会社内の
調査で、南北2間、東西4間の建物が見つかりま
した。この東側の真ん中にある柱抜き取り穴に、
須恵器の壺と蓋のセットが納められていました。



▲柱の抜き取り穴に納められた土器

土器を納める例は多いものの、この壺は初めての
ものです。普通この形態は骨壺として利用される
ことが多いのですが、ここでは引つ越しの時のま
つりに使用していたようです。中には何も入って
おらず、あるいは腐ってしまったのかもしれない
せん。他の例では石や瓦の破片を入れているものも
あります。現在の感覚では建物を建てる前の地鎮
祭の方を重要視しますが、長岡京ではその例はむ
しろ少なく、このような建物廃棄時のまつりの方
が多く見られます。まつりの具体的な内容はよく
わかっていませんが、今まで暮らした建物と長岡
京への惜別、そして新しい都への期待と不安を胸
に、祈りを捧げたのでしよう。



▲納められていた壺と蓋のセット